

N+V-ing 型英語複合名詞についての認知言語学的考察

1. はじめに

本論文は、英語の N+V-ing 型の複合名詞に関して、認知言語学の諸概念、特にゲシュタルト性、メトニミーなどを用いることにより、行為性が高いものから行為性が低くゲシュタルト的意味が創発されているものまでグレイディエンスが観察できることを提示し、そのグレイディエンスが生じる要因を考察することを目的とする。

2. 従来における複合名詞の扱い

Jespersen (1942)、Quirk et al. (1985)、Johnston and Busa (1999)、影山 (1993) などが複合名詞の研究として挙げられるが、それぞれ以下の点で問題点がある。

- ・構成要素間の意味関係の記述に留まっており、それらの分類の相互の関係性や連続性については述べられていない。
- ・文法カテゴリーの観点（または統語論的観点）からのみ考察するアプローチがあるが、N+V-ing 型英語複合名詞について言えば、文法カテゴリーからの説明が難しいものがある。
- ・文脈を排除して、語単独でその意味を規定するアプローチでは、N+V-ing 型複合名詞の多義性は扱えない。

3. 認知言語学のアプローチ

本論文では、認知言語学のアプローチで、分析対象の言語事実である N+V-ing 型英語複合名詞をみていくこととする。

4. N+V-ing 型英語複合名詞の分析

行為性が高い N+V-ing 型複合名詞は、ゲシュタルト的意味の創発は比較的小さい。しかし、行為性の低い N+V-ing 型複合名詞は、構成要素である V-ing 名詞自体が〈行為〉を意味しておらず、その複合語全体として〈行為〉でなく、そこから付随して生じる〈モノ〉*になっている。本章では、N+V-ing 型英語複合名詞に関して、こういった言語事実があるかを

* これ以降使用する〈モノ〉という用語について、Langacker(1987)が規定している thing (モノ)とは多少異なる。Langacker(1987: 189)は、"a noun designates a thing"と述べているように、名詞(noun)が指すものを〈モノ〉と規定しており、それは具象的なものから、抽象的なものまで含まれる。しかし、本論文で使用する〈モノ〉については、具象的な意味合いが強い。よって、本論文においては、〈行為〉は〈モノ〉に含まれない。

提示し、行為性が高いものと行為性が低いものの間に意味のグレイディエンスが見られると考え、またそのグレイディエンスはどのような動機づけによって生じているかを考察する。

●行為性の高い N+V-ing 型複合名詞

〈行為〉を意味する N+V-ing → *time killing, mountain climbing, story telling, sound recording*

〈行為〉も意味し、〈モノ〉も意味するもの → *sound recording* など

●行為性の低い N+V-ing 型複合名詞

行為性の低い N+V-ing 型複合名詞とは、純粹に〈行為〉を意味するのではなく、それに付随して起こる関連性のある意味に変容しているものを指す。

〈モノ〉を意味する N+V-ing → *apartment building, oil painting, salad dressing* など

〈モノ〉も意味し、〈行為〉も意味するもの → *oil painting* など

N+V-ing 型複合名詞の意味に注目すると、それらには〈行為〉を意味するものから〈モノ〉を意味するものまで、段階性が生じると考えられる。

V-ing 名詞の意味には、〈行為〉から〈モノ〉まで段階性がある (cf. Quirk et al 1985: 1290-1292) ことが、それを第二構成要素とする N+V-ing 型複合名詞全体の行為性のグレイディエンスの要因となっていると考えられる。〈モノ〉を指示する V-ing 名詞は、メトニミーによってその行為性が低下し、ゲシュタルトの意味が創発されているものだと考えられる。e.g. *recording* → 〈録音〉・〈録音した記録物〉、*building* → 〈建設〉・〈(建設物としての)ビル〉

しかし、N+V-ing 型複合名詞について、〈行為〉か〈モノ〉というどちらかの定着した意味があるものから、文脈によってその意味が規定される多義的なものまで段階性がある。e.g. *hand writing* → 〈手書き〉・〈筆跡〉、*sound recording* → 〈録音〉・〈録音物〉、*oil painting* → 〈油絵〉・〈油絵を描く〉

5. おわりに

本論文では、N+V-ing 型英語複合名詞に関して、認知言語学の枠組みでこの複合名詞が有する〈行為〉と〈モノ〉という意味の間に見られるグレイディエンスを提示し、そのグレイディエンスの要因の一つとしてメトニミーを挙げて例文をもとに分析を行った。

(1970 字)

【主要参考文献】

- 上原 聡・熊代 文子. 2007. 『音韻・形態のメカニズム-認知音韻・形態論のアプローチ-』 東京: 研究社
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』 東京: ひつじ書房.
- 島村礼子. 1990. 『英語の語形成と生産性』 東京: リーベル出版.
- 野田 大志. 2009. 「構文的多義ネットワークにおける並列型及び補文型複合動詞の位置づけ」, 『日本認知言語学会論文集』 9: 143-153.
- 深田智・仲本康一郎. 2008. 『概念化と意味の世界-認知意味論のアプローチ-』 東京: 研究社
- 山梨正明. 1988. 『比喩と理解』 東京: 東京大学出版会.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.
- 山梨正明. 2009. 『認知構文論』 東京: 大修館書店.
- Heyvaert, Liesbet. 2009. 'Compounding in Cognitive Linguistics', Lieber, Rochelle, Stekauer, Pavol (ed.) *The Oxford Handbook of Compounding*. 233-254: Oxford: Oxford University Press.
- Jespersen, Otto. 1942. *A Modern English Grammar on Historical Principles (MEG)*, VI:134-157. Sydney: George Allen & Unwin.
- Johnston, Michael and Federica Busa. 1999. "Qualia Structure and the Compositional Interpretation of Compounds", Evelyne Viegas (ed.) *Breadth and Depth of Semantic Lexicons*. 167-187: Massachusetts: Kluwer Academic Publishers.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar: Theoretical Prerequisites*. Volume 1: Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2000. "Dynamic Usage-Based Model." In: Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.) *Usage-Based Model of Language*. Stanford: CSLI Publications.
- Quirk, Randolph et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.